

シリーズ
地質調査のパートナー(5)

ハンマー

吉川 敏之¹⁾

石を割るのに使うハンマーは、野外調査では必需品です。まず、新鮮な面を観察するときや標本を整形するときに岩石を割るために使います。また、急な斜面や崖を登るときに、ピッケル代わりにも使います。更に、写真を撮るときにスケール代わりにも使います。

ハンマーにもさまざまな種類があり、先端部分(ヘッド)の形状、重さ、柄の長さなど異なる種類を使い分けるのが普通です。地質調査用のハンマーは、ヘッドの一方が細くなっています。それも、大きく分けると尖ったピック型、平たいチゼル型があり、それぞれ主に硬い石用、軟らかい石用に利用されています。

学生時代の巡検で、手元にタガネがないときに2本のハンマーを使い、1本をタガネ代わりに使おうとしたところ、先生に怒られたことがあります。何でも、ハンマーのヘッドのように硬い鉄同士をぶつけると、はじめて割れやすく、危険なのだそうです。タガネの場合は軟らかい鉄できているため、変形しますが砕けることはないのだそうです。実際、当時愛用のタガネの頭はつぶれた上に反り返り、カールしたようになっていました。

最初に述べたように、野外調査にはハンマーは必需品なので、学生のとき野外実習が始まる前に真っ先にも買いました。しかし、地質調査用のハンマーは決して安価ではありません。初めて買ったハンマーは新品のE社製ハンマーでしたが、学生の身にはかなりの負担でした。それでも、青いラバーのグリップがいかにも専門用具然としていて所有欲を満足させてくれました。喜んで使っているうちに、先端部の角が落ち、丸くなってしまいました。こうなると、標本を整形したり、露頭の風化面を剥ぐように割ろうとしたりするときに、うまく割れなくなってしまいます。

卒業論文のために本格的な野外調査に入る前に、指導教官の先生にハンマーが丸くなってしまって良く割れませんと言ったところ、お古を譲ってくれました。

ただし、ふつうのハンマーではありません。先生が東南アジアの野外調査に出かけたとき、キャンプのたき火のそばにあったため、柄のラバー部分にたき火の火が燃え移り、鉄の部分だけが焼け残ったという筋金入りのE社製ハンマーでした。しかし、ラバーは燃えてなくなったといっても文字通り筋金入りで、柄には芯である鉄の部分先端まで残っており、ヘッドも自分のハンマーより丸くなっていなかったの、ありがたくいただきました。これに自分で木を削ってグリップを作り、布のテープ(自転車のハンドルに使うバーテープ)をぐるぐる巻きにして握りやすくし、卒論の期間を使い通しました。このハンマーもさんざん酷使したので卒論の終わる頃にはすっかり丸くなってしまいましたが、心なしか最初のものより丸くなりにくかった気がします。当時は、たき火で燃えて焼きが入ったためだろうと考えていましたが、今になって冷静に考えれば、ハンマーの使い方が上達したためだろうと思います。

就職後、ハンマーは消耗品で買えるようになり、何本かのハンマーを手にしてきました。道具の性能向上とともに、それを使う技術もより一層向上させたいものです。



第1図 各種のハンマー。左は最も長い期間(約12年)使用したS社製。中央はE社製で、右が卒論で使用した筋金入りハンマー。

1) 産総研 地質情報研究部門

キーワード:ハンマー, 地質調査, 野外調査